

## 夫婦の家事・育児の分担の実態は

### ◆コロナ禍以降、初の家庭動向調査結果を公表

2023年8月、国立社会保障・人口問題研究所は「[第7回全国家庭動向調査](#)」（22年7月実施）の結果を発表した。前回の調査は18年で、1993年からおおむね5年おきに実施されており、出産や子育て、家事、介護などの家庭の実態や家族関係の変化要因を明らかにし、少子高齢化関連の施策の基礎資料として活用されている。調査テーマの1つである「夫婦の家事・育児」の分析は、家事については妻が60歳未満の世帯、育児については妻が50歳未満で12歳未満の子どもと同居している世帯を対象にしている。

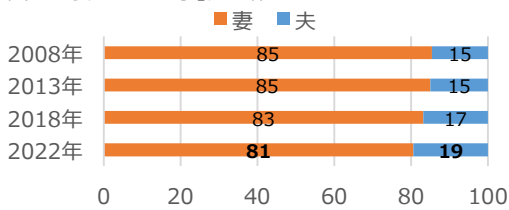
### ◆夫の家事・育児分担は増加傾向にあるが、妻の分担割合は約8割と変わらず

表1. 妻・夫の家事・育児時間と2008年比増減

単位:分		2008年		2022年		増減	
		妻	夫	妻	夫	妻	夫
家事時間	平日	278	31	247	47	-31	16
	休日	305	62	276	81	-29	19
育児時間	平日	455	75	524	117	69	42
	休日	572	273	724	423	152	150

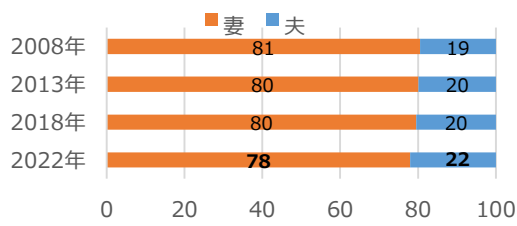
夫婦の1日の平均家事時間は、妻は平日247分、休日276分、夫は平日47分、休日81分と、08年の第4回調査以降、妻は減少、夫は増加している。一方、育児時間は、妻は平日524分、休日724分、夫は平日117分、休日423分と夫婦ともに増えており、特に休日が増加している。（表1.）

図1. 妻・夫の「家事」分担割合



妻と夫で行う家事・育児の総量を100としたとき、それぞれが分担する割合の平均値の推移を08年からみると、夫の家事分担割合は、15%から19%に4ポイント増加（図1.）、夫の育児分担は、19%から22%に3ポイント増加している（図2.）。

図2. 妻・夫の「育児」分担割合



夫の家事・育児の分担は増加傾向にあるものの、大きな変化とまではいえず、いずれもなお約8割を妻が担っている。

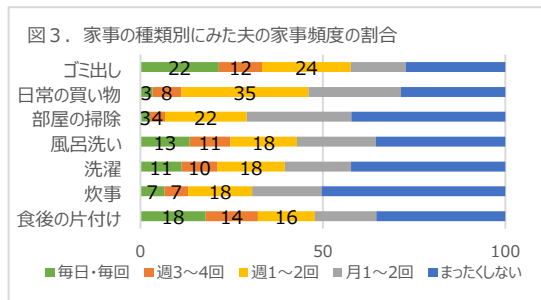
出所：[第7回全国家庭動向調査](#) 国立社会保障・人口問題研究所 より ARC作成

調査では、夫の家事・育児に関する妻の期待についても聞いている。「期待す

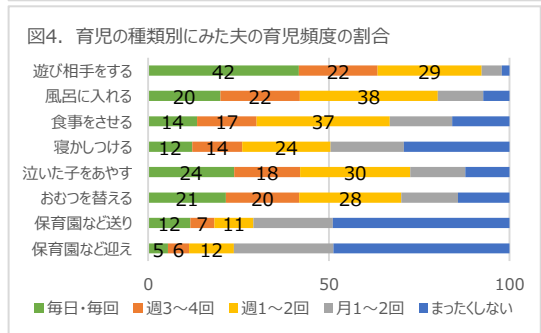
## ハイライト

る」という回答の割合は、全体では、家事44%、育児58%だが、29歳以下は、それぞれ70%、74%、「正規」従業の妻は、57%、64%と、割合が最も高い。

### ◆夫が担う家事は「ゴミ出し」、「日常の買い物」、「食後の片付け」



調査では、具体的に7種類の家事を行う頻度を聞いている。「週に1~2回」以上行う割合が比較的高いのは「ゴミ出し」（58%）、「日常の買い物」（48%）、「食後の片付け」（48%）で、炊事や掃除は頻度が低い。（図3.）また、18年から調査項目に追加された、食材や日用品の在庫を把握する、食事の献立を考える、といった、いわゆる「見えない家事」も妻が担当している割合が高いことが指摘されている。



出所：第7回全国家庭動向調査 国立社会保険・人口問題研究所 より ARC作成

一方、3歳までの子どもの8種類の育児についてみると、夫の実施頻度が「週に1~2

回」以上の割合が8割を超えるのは、「遊び相手をする」と「風呂に入れる」である。保育園の送り迎えは圧倒的に妻の仕事になっている。（図4.）家事に比べると育児の方が、全般に夫が行う頻度は高い。

### ◆家事・育児の平等な役割分担で目指す「令和モデル」

内閣府が公表した令和5年版男女共同参画白書では、若年層を中心に生活様式や働き方への考え方が大きく変化しており、サラリーマンの夫と専業主婦の妻の世帯を前提とした「昭和モデル」から、誰もが希望に応じて、家庭でも仕事でも活躍できる「令和モデル」への転換を掲げている。早期実現に向けて、①仕事・働き方の環境整備、②仕事と家事・育児のバランスのとれた生活、③女性の経済的自立の3つを優先事項としており、家事・育児の分担は重要事項の1つである。

若年層はもとより、長寿化や生活様式の多様化が進むなか、どの世代・性別でも仕事、家事、育児を担う可能性があるが、「男性は仕事」、「女性は家庭」という固定的な性別役割分担からの脱却は簡単には進まないようだ。 【新井佳美】